

## [65] ベジヤール振付『中国の不思議な役人』東京バレエ団初演

### 強烈な身体エネルギーを発散

2004年2月21日 東京新聞 夕刊

ベジヤール振付のバレエ『中国の不思議な役人』を東京バレエ団が初演した。この作品は一九九四年にベジヤール・バレエ・ローザンヌの来日公演で上演されているが、当時はこのような作品を日本のバレエ団が上演することなど、とうてい考えられなかった。都会の裏町を思わせる大胆な装置やスモークに煙る照明もバレエでは珍しかったが、それ以上に、多人数の男性ダンサーが激しい動きを叩きつけ、強烈なエネルギーを発散する舞台上に圧倒されたものだった。

今回この作品を東京バレエに薦めたのはベジヤール自身だという。「枕草子」を題材にした新作を準備していたのが振付家の体調のせいでは不可能になり、その代わりとして実現した。客演のダンサーを一人も交えず、それぞれに一筋縄ではいかない役どころをすべてバレエ団のメンバーが演じている。

その初演を見て思ったのだが、もしかすると優

## [65] ベジヤール振付『中国の不思議な役人』 東京バレエ団初演

### 強烈な身体エネルギーを発散

2004年2月21日 東京新聞 夕刊

美な童話バレエなどよりも、この作品は現在の日本のバレエに合っているのではないか。粗暴とすれすれの剛毅や、男が女を演じる屈折した性は、日本の文化とも微妙に響き合うものがあるし、何よりこれは身体的なテクニックをストレートに発揮できる作品だ。ともあれ、この十年で日本のバレエがじつに大きく前進もし、変貌を遂げたことを如実に実感させられた。

無頼漢が娘を使って男を誘惑させ、半殺しの目に遭わせるといふスキャンダラスな筋立てに加えて、東洋にまつわる一種歪ゆがんだ神秘思想がこのバレエの、というよりそもそもバルトークの音楽の芯しんになっている。

最後の中国人を含めて三人のカモが登場するが、人物として古今東西の異質の男性像を並べているところが、いかにもベジヤールらしい発想である。毛皮をまとった北欧的な英雄ジークフリードもハシチング帽の現代人も他愛なく退散するが、最後

## [65] ベジヤール振付『中国の不思議な役人』 東京バレエ団初演

### 強烈な身体エネルギーを発散

2004年2月21日 東京新聞 夕刊

の中国人だけは殺されても死なずに、娘を求めつづける。その不気味さと不思議さこそ、まさに異文化を目の当たりにした時の驚きに他ならない。

始めは彼を疎んだ娘が、最後には中国人に身をゆだねる。バレエでは象徴的に、娘が投げた金髪のカツラを彼が抱きしめて息絶えるのだが、この場面がニジンスキー振付の『牧神の午後』にそっくりなのも興味深い。

娘を男性ガンサーが踊り、ハンチング帽の男を女性ガンサーが踊る。筋肉隆々の女と、華奢きゃしゃな男という表現にも、現代的なメッセージを読みとらずにはいられなかった。